

今回は、湖東三山の北にある勝楽寺と敏満寺を紹介し

す。

慶雲山勝楽寺は、犬上郡甲良町正楽寺に所在して、南北朝時代の暦応4年（1344）に佐々木導誓が祖父の菩提を弔うために開基したといわれる寺院です。佐々木導誓は出家後の名で、もとは佐々木高氏といいました。導誓は佐々木六角氏の庶流にあたる京極氏の出身で、鎌倉幕府滅亡後は足利高氏（尊氏）を助けて活躍し、一時期5カ国の守護大名となって六角氏を凌ぐ権勢を持っていました。

導誓は、もともと坂田郡柏原（現在の米原市）に本拠を置いていましたが、甲良郡内の山に城を築いて移転しました。これは、京の情勢に対応するため、琵琶湖に近い要害の地を選んで移転したとも考えられます。このとき、京都東福寺の雲海正意を招聘して山城の麓に寺院を建立したのが勝楽寺のはじまりです。湖東山麓の大大寺院はいずれも天台寺院ですが、勝楽寺は武家

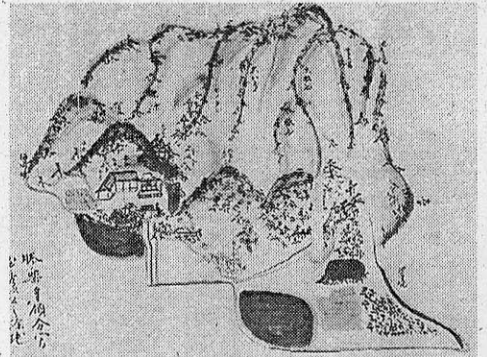
である導誓が建立した禅宗寺院で、現在も臨済宗建仁寺派に属しています。応安6年（1373）に導誓が78歳で没した後も勝楽寺は存続しますが、戦国時代の兵火によって伽藍を失い、江戸時代になって彦根藩井伊氏の援助で再興されて現在に至っています。

現在の勝楽寺の寺域は旧来のままといわれており、江戸時代に描かれた絵図にも現在とあまり変わらない伽藍が描かれています。山門は、後世の修理がはいっているものの創建時を示す唯一の建物といわれる四脚門です。また、導誓終焉の地にふさわしく、現在には京都国立博物館に寄託されている導誓の画像や、導誓の墓といわれる苔むした石塔が伝えられています。重要文化財の大日如来坐像は、戦国時代の兵火の際に村人が酒池

に像を隠して災禍を逃れ、再び掘り出したときに水が湧き出たという伝承があります。この池は、大日池として今も残されています。

また、勝楽寺のある甲良町から北へ2・5キロメートル離れた所に、名神高速道路多賀サーブスエリアがあります。その一角に公園があり、運転の疲れを癒すドライブや家族連れの遊ぶ姿が見られます。このサーブスエリア一帯が中世に隆盛した「敏満寺」と呼ばれる寺院だったことに気づく人は少ないようです。

## 勝楽寺と敏満寺



「勝楽寺文書」に描かれた勝楽寺絵図（県立安土城考古博物館蔵）

敏満寺の集落の前面に広がる水田地帯は、奈良時代には水沼荘と呼ばれた東大寺の荘園でした。荘園絵図に寺院は描かれていませんが、平安時代後期には敏満寺の名が記録に現れます。鎌倉時代には、柱間七間もある本堂や三重塔など数多くの建物が建ち並ぶなど大寺院の体裁を整えていたようです。このころには、

平家による南都寺院焼き打ちで壊滅した奈良東大寺の再建を進めていた俊乗坊重源が、敏満寺と深くかかわってき

ます。敏満寺は東大寺の再建に協力し、それに感謝した重源は銅製五輪塔と仏舎利を敏満寺に寄進しました。この塔は重要文化財に指定されています。火輪部が三角錐である珍しい形状をしており、同様の五輪塔は、重源が東大寺再建の基盤とした別所や東大寺に残されています。

このように、鎌倉時代に隆盛した敏満寺も、室町時代に

なると近江守護の佐々木六角氏の干渉や災害などで徐々に衰退し、永禄5年（1562）の浅井長政の焼き打ちや元亀元年（1570）の織田信長による攻撃によって衰亡し、鎮守社であった胡宮神社や寺坊の福寿院を除いて廃絶してしまいました。

ところが、名神高速道路建設直前の昭和34年（1959）の発掘調査、そしてサーブスエリア拡張工事に伴い昭和57年（1982）から平成12年（2000）に順次行われた発掘調査により、山門の礎石や防御施設を伴う遺構、寺坊や町屋と考えられる区画や埋蔵施設などの跡が確認されて、大規模な寺院だったことがあらためてわかりました。さらに、背後の青龍山では、多賀町教育委員会の調査で大規模な中世墓地がみつかり、埋葬した場所の存在が明らかになりました。

このように、鎌倉時代や室町時代に大伽藍を誇りながら戦国時代の兵火で衰退した勝楽寺や敏満寺ですが、同様な災難によって衰亡した記録に残らない寺院は、琵琶湖を取り囲む山中・山麓に多数あったといえます。

（滋賀県文化財保護協会 神保忠宏）

## 兵火で衰退した山の寺院